

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the Relationship between the Accent and Segments in the Takamatsu Dialect (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古, Nakai, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1743

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



高松方言におけるアクセントと 語音の関係について(2)

中 井 幸比古

はじめに

中井(1995b)(以下「前稿」)において、香川県高松アクセントの変遷の過程(A→B→C→D)を推定し(p.66)、C段階(壮年層)におけるアクセントと語音の関係について報告を行った。また、中井(1995・近刊)ではA段階のアクセントについてやや詳細な報告を行い、A→Bへの変遷についても触れた。

本稿では、D段階(若年層)の話者に関する調査報告を行い、C→Dへの変化の実態を明らかにする(1節)。話者は前稿と同じ、真柴フミ子氏(C)と山坂晃平氏(D)である。今回報告するC→Dへの変化は次の2点である。

①語中の拍内下降の消滅。それに伴う、母音の広狭と音調型の関係の消滅。また、語中ではなく語末においては、若でも拍内下降が辛うじて残存しているものの、拍内下降は薄れ、通常の下降としても現れるようになる。それに伴い、語末の拍内下降を有する型の所属語彙が減少し、とくに4拍以上ではほぼ全滅している。②共通語化その他の要因による、所属語彙の変化。

若年層については、共通語化の度合にかなりの個人差がある。本稿は、共通語化の、一つの段階の報告にすぎない。

なお、現時点における「壮-若」の世代差・対応が、高松アクセントの実時間上の変化に一致すると考えられる場合、世代差・対応を「変化」とみなす。

壮-若の世代差の報告に加えて、前稿に対する補訂を行う（2節）。取り上げるのは以下の4点。語頭が長音節の場合の高起式の音調（2.1節）、促音と音調の関係（2.2節）、壮年層における下降のずれの確かさの度合（2.3節）、研究史（2.4節）。

1.1 1拍体言——顕著な変化なし——

1拍体言の壮-若の対応を表に示す。表からわかるように、1拍については、顕著な変化はない。表中「=」を付けたのは、壮-若の音調が一致するものである。以下同じ。なお、硬い・文章語的な語の長さに世代差がある（中井1994a）。

複数の型の併用がある項目は、計算が面倒なので、特に注記した場合（類別語彙・希少型）を除き、すべて省略する。以下同様である。

1拍	
壮-若	語数
H0-H0=	7
H0-H1	1
H1-H0	2
H1-H1=	20
H1-L0	1
L0-H0	4
L0-H1	3
L0-L0=	17

1.2 2拍体言——L2F・L0の減少と、H1・H0の増加——

1.2.1 対応全般

対応全般を以下に示す。表中「@」は注目される対応である（以下同じ）。2拍については母音の広狭の条件による分類を行う。nは狭母音を、wは広母音を含む拍、mは特殊拍、oは任意の拍である。

語末の拍内下降を含むL2F型の所属語彙の減少が

2拍	全部	nm	nn	wm	wn	nw	ww
壮-若							
H0-H0=	521	4	87	31	146	104	149
H0-H1@	70	3	10	17	10	16	14
H0-L0	1	1	0	0	1	0	0
H0-L2F	4	0	0	0	1	0	3
H0の変化率		13%					
H1-H0@	54	3	17	3	28	2	1
H1-H1=	611	55	160	165	191	2	38
H1-L0	1	1	1	0	0	0	0

甚しく、85%もの語彙が別の型に移っている。音調型について、若で語末拍の拍内下降も薄れていることも関係しよう。L2Fに次いでL0に不一致の語が目立つ。変化の方向は、L2FとL0ともに、H1とH0に向かっている。

壮では、H1にowの語はほとんどなかった（前稿）。しかし、L2F・L0からH1に移動した語の語音条件はまぢまぢであるため、若ではもはや、

H1-L2F	0	0	0	0	0	0	0
H0-L2F	4	0	0	0	1	0	3
H1の変化率 8%							
L0-H0@	45	1	1	11	10	6	16
L0-H1@	56	5	11	18	8	3	11
L0-L0=	120	14	12	19	22	12	41
L0-L2F	10	0	0	0	1	1	8
L0の変化率 48%							
L2F-H0@	55	0	1	0	5	24	25
L2F-H1@	238	0	8	8	1	92	129
L2F-L0	2	0	0	0	0	2	0
L2F-L2F=	52	0	0	0	3	18	31
L2Fの変化率 85%							

や、語音とアクセント型の関係は断ち切られている。なお、3拍以上についても、若では、語音とアクセント型の関係はもはや見られないので、3拍以上では語音による分類を行うのを省く。

L2F・L0と異なり、壮でH1・H0の語彙は、若でもほぼ安定しているが、そのH1とH0相互の間で、語彙が若干移動している。

1. 2. 2 語種別の対応

L2F・L0が、H1とH0のどちらに向うかは、一つには語種が関係すると思われる。このため、語種（和・漢・洋・混種語）ごとの対応を見る。議論を単純化するため、前節で＝・@を付けたもののみを検討する。また、個々の語の語種の認定には種々

壮-若	和	漢	洋	混
H0-H0	429	87	1	4
H0-H1	44	26	0	0
H1-H1	171	383	53	4
H1-H0	39	25	0	0
L0-L0	70	50	0	0
L0-H0	28	17	0	0

問題があるが、論旨に影響を与えるほどではないと考える。

壮でL2F・L0の変化方向について、H1への変化は和漢洋に満遍なくまたがっているが、H0への変化

L0-H1	70	50	0	0
L2F-L2F	42	8	2	0
L2F-H0	44	9	1	1
L2F-H1	112	109	15	2

は和語と一部の漢語にかたよっており、洋語にはほとんど見られない。これは、讃岐式諸アクセントにおいて、2拍の「基本型」が和語（と日常頻用の漢語）でH0、洋語でH1であるためだろう。

1. 2. 3 2拍体言の類別語彙について

金田一春彦氏の類別語彙（『国語アクセントの史的研究』による）のアクセントを見てみよう。類別語彙は、和語と、一部基礎的な漢語を含む。語音との関係も見る。

下の表において、!は各類に優勢な型。類別語彙に関しては、複数の型の併用の語も含め、その場合は各音調型を1と数える。X類は除く。

壮年層

	全部	nm	nn	wm	wn	nw	ww
1類	!H0-118	H0-4	H0-24		H0-21	H0-27	H0-42
	H1-0						
	L0-11	L0-1			L0-1	L0-2	L0-7
	L2F-4				L2F-1	L2F-2	L2F-1
	他-2						他-2
2類	H0-5					H0-3	H0-2
	!H1-19	H1-1	H1-7		H1-10		H1-1
	L0-0						
	!L2F-26	L2F-1				L2F-13	L2F-12
	他-1	他-1					
3類	!H0-111		H0-21	H0-3	H0-35	H0-29	H0-23
	H1-4		H1-2	H1-2			

	L0-5						L0-5
	L2F-4					L2F-1	L2F-3
	他-2					他2	
4類	H0-1		H0-1				
	H1-2		H1-1	H1-1			
	L0-62		L0-15	L0-1	L0-11	L0-10	L0-25
	L2F-2		L2F-1			L2F-1	
	他-1		他-1				
5類	H0-0						
	H1-1				H1-1		
	L0-6		L0-1		L0-3		L0-2
	L2F-30		L2F-3	L2F-1	L2F-7	L2F-5	L2F-14
	他-1					他-1	
若年層							
	全部	nm	nn	wm	wn	nw	ww
1類	H0-119	H0-5	H0-25		H0-20	H0-27	H0-42
	H1-6				H1-2	H1-2	H1-2
	L0-4				L0-1		L0-3
	L2F-1						L2F-1
2類	H0-23		H0-3		H0-3	H0-9	H0-8
	H1-28	H1-1	H1-7		H1-7	H1-6	H1-6
	L0-0						
	L2F-6					L2F-2	L2F-4
3類	H0-109		H0-21	H0-3	H0-32	H0-30	H0-23
	H1-7		H1-1	H1-2	H1-1		H1-3
	L0-5				L0-1		L0-4
	L2F-3				L2F-1		L2F-2
4類	H0-7				H0-2	H0-2	H0-3
	H1-17		H1-8	H1-1	H1-1	H1-1	H1-6
	L0-41		L0-12	L0-1	L0-8	L0-7	L0-13
	L2F-4						L2F-4
5類	H0-1				H0-1		
	H1-27		H1-3	H1-2	H1-9	H1-4	H1-9
	L0-4				L0-2		L0-2
	L2F-14					L2F-4	L2F-10

類ごとに優勢な型を下にまとめる：

	壮	若
1類	H0	H0
2類	語音によりH1, L2F	(語音により)H1, H0
3類	H0	H0
4類	L0	L0, H1
5類	L2F	H1, L2F

ここからわかるように、4・5類、特に5類はH1への変化が著しい。

2類はH0への変化が目立つ。語彙全体では壮でH1の語彙は安定しているが、類別語彙に限るとH0への変化が著しい。nw・wwに特に顕著である。

壮でL2Fのもの(2類owと、5類)は、類によって変化の方向が異なり、5類ではH1に、2類ではH0に変化するものが多い。これはなぜか。共通語アクセントでは、2類は2、5類は1が最も多い。従って、5類は共通語の1の影響を受けて、H1へ変化するのが自然である。一方、2類は、共通語の2の影響を受けて、L2Fがもっと増えそうなのに、実際にはH0への変化が多い。これは高松アクセントにおいて、語末拍の下降を回避する傾向が強いこと、2拍体言の和語の基本型がH0であることが原因であろう。

1類はH0で壮若ともに安定している。共通語でも0が原則であり、変化する理由がないからである。

3類も壮若ともH0で、変化していない。3類は共通語で2が原則だから、1類と異なり、L2Fに変化してもよさそうであるが、上記のように、この型は高松アクセントでは避けられる型であるから、変化が起こらないのであろう。そのうえ、高松アクセントでは、1・3類が合流しているから、「1類がH0のままで3類だけがL2Fに変化する」という分裂を起こすことは困難である。

1. 3 3拍体言

——L2Fの消滅とH1・L2への変化、L3Fの減少——

1. 3. 1 対応全般

まず、壮-若の対応全般を、語種に分けて以下に示す。

3拍以上では、語中の拍内下降の消滅のため、音調型の枠組そのものが壮若で異なる：3拍ではL2Fが消滅している。L2Fは、前稿p.66の図式通りならL2へ変化するはずであるが、実際には、特に洋語・漢語でH1への変化が著しい（基本型化・共通語化）。和語ではH1に加えて図式通りのL2や、さらにH0（和語の基本型）への変化もかなりある。

また、L3Fの所属語彙も減少が著しい。拍内下降は語中で完全消滅し、語末でも消滅寸前である。語末の拍内下降は消えがちで、た

語種とアクセント（3拍）					
壮-若	漢	和	混	洋	計
H0-H0=	98	299	38	4	439
H0-H1	12	12	3	—	27
H0-L0	25	25	1	4	55
H1-H0	13	4	1	1	19
H1-H1=	153	26	5	48	232
L0-H0	44	47	9	3	103
L0-H1	40	5	2	1	48
L0-L0=	241	82	14	7	344
L2-L2=	2	14	3	—	19
L2C-H1	18	2	—	19	39
L2C-L2=	4	2	1	8	15
L2F-H0@	13	33	1	3	50
L2F-H1@	83	40	4	39	166
L2F-L2@	15	33	3	8	59
L3F-H1@	2	8	—	2	12
L3F-L0@	1	11	—	—	12
L3F-L2@	—	10	1	—	11
L3F-L3F=	5	11	—	1	17
計 1667（語種不明・複数型使用の語を除く）					

例えば、L3Fは○○「○〃～○○「○。（中井1994a p.315の記述は、語中の拍内下降が完全消滅はしていないかのように誤解を与えるおそれがあるが、語中では完全消滅している）。それに伴って所属語彙も減少しつつあるので

あろう。

さらに L0-H0 の変化が目立つ。これはおそらく共通語化（讃岐の L0 は共通語で 0 で対応することが多い）と、和語の基本型化（H0）が原因であろう。

1. 3. 2 3 拍体言の類別語彙について

3 拍体言の類別語彙について、以下に結果をまとめる。類別語彙については、やはり複数型の併用の語も含める。

1 類 H0-H0=	64	4 類 H0-H0=	38	6 類 H0-H0=	1
H0-L0	3	H0-L0	2	L0-H0@	4
H1-H0	1	H0-L2	1	L0-L0=	20
H1,H0-H1	1	H1, H0-H0	1	L0-L2	1
L0-H0	5	L0-H0	4	L3F-L0@	1
L0-L0=	4	L0-L0=	1	7 類 H0-H0=	1
L2F-H0	1	L2-L2=	1	H0-H1	1
L2F-L2	1	L2C-L2=	1	L2-L2=	1
L3F-L0@	1	L2F-H0@	3	L2, L2F-L2@	1
2 類 H0-H0=	1	L2F-L2@	2	L2F-H0	1
H1-H0	1	L2F, L2-L2, H0@	1	L2F-H1@	3
H1-H1=	4	5 類 H0-H0=	5	L2F-L2@	4
L0-L0=	3	H0-H1@	4	L3F-H1@	1
L2, L2F-L2@	1	L0-H0	1	L3F-L0@	1
L2F-L2@	1	L0-H1	1	L3F-L2@	1
L2F-H0@	1	L0-L2, L0	1	L3F-L3F=	4
L3F-L2@	1	L2-L0	1		
3 類 H0-H0=	2	L2C-H1	1		
L2F-H1@	1	L2F-H1@	5		
L2F-L2	2	L2F-L2@	5		
L3F-H1	1	L2F-H0@	1		
		L3F-H0@	1		

前節で述べた一般的傾向以外の事柄について触れる。

2拍同様、H0（1・4類、一部の5類など）は安定している。

7類は、和田（1958）が指摘するように、祖体系ではL2だったと思われる語が、壮でL2Fに変化している。若ではL2Fが消滅し、L2またはH1に変化しているため、壮よりもかえってL2の語が増えており、一見、祖体系に若干近づいたように見える。

1. 4 4拍体言——語中のみならず語末の拍内下降も消滅——

4拍体言の対応は以下のものである。壮で所属語彙が少ない、H4F・L4F・H3Fが現れる語は、複数型の併用の場合も含める。

H0-H0=	1279	L0-H0	218	L3-L3=	121
H0-H1	25	L0-H1	1	L3C-H0	1
H0-H3	21	L0-H1	8	L3C-H1	1
H0-L0	93	L0-H3	2	L3C-L2	1
H0-L2	50	L0-L0=	406	L3F, L3-L2@	1
H0-L3	21	L0-L2	25	L3F, L3-H0@	1
H1-H0	33	L0-L3	20	L4F-H1@	1
H1-H1=	201	L2-H0	9	L4F-H3@	2
H1-H3	3	L2-L0	4	L4F-L0@	1
H1-L0	1	L2-L2=	83	L4F-L2@	3
H1-L2	28	L2-L3	2	L4F-L3@	4
H1-L3	8	L2C-L2	11	L4F-L4F=	1
H2-H1	3	L2F-H0@	19	L4F, H4F-H0@	1
H2-H3	1	L2F-H1@	5	L4F, L0, L3-L0@	1
H2-L3	2	L2F-L0@	4	L4F, L3-H0@	3
H3-H0	1	L2F-L2@	75	L4F, L3-L0@	2
H3-H3=	3	L2F-L3@	4	L4F, L3-L0, L3@	1
H3-L0	1	L3-H0	24	L4F, L3-L2@	2
H3-L3	3	L3-H1	19	L4F, L3-L3@	7
H4F, H2-H3@	1	L3-H3	3		
H4F, H3-H0@	1	L3-L0	20		
H4F, H3-H3@	1	L3-L2	27		

若では、3拍までは何とか残っていた語末の拍内下降を含む型が、4拍ではほぼ全滅している。わずかに「蜘蛛の巣」の一語が残存するのみだが、これも完全な1語ではない可能性がある。

L2Fは前稿の図式通りL2への変化が多い。H0への変化もやや目立つが、H0への変化はほぼすべてが和語である：サカズキ(盃)、ソデツケ(袖付)、ハタアゲ(旗揚)、モノズキ(物好)。

その他は、概して、壮-若のアクセントが一致する語が多い。

1.5 5拍体言一語中のみならず語末の拍内下降の消滅し、H4F・L4FはH3・L3に――

5拍は、形態素の切れ目がアクセントと関係するため(前稿)、語構成別に対応をあげる。

				(3+2 続き)		(4+1 続き)	
・1+4		・3+2		L4-L0	11	L5F-H4=	1
H0-H0=	4	H0-H0=	167	L4-L2	8	L5F-H4, H3=	2
H0-L0	2	H0-H3	6	L4-L3	4	L5F-L0=	1
H1-H3	1	H0-H4	1	L4-L4=	23	L0, L5F, L3-L0=	1
L0-L0=	7	H0-L0	29	L4C-L0	1	L5F-L3=	1
L2-L2=	5	H0-L2	5	L4C-L4=	1	L5F-L4=	1
L2C-L0	1	H0-L4	1	L5F-H0@	4	・切れ目なし	
L2C-L2=	18	H1-H1=	3	L5F-H3@	19	H0-H0	8
L2F-H0	1	H1-H3	1	L5F-H3, H4@	2	H0-H1	1
L2F-L2@	18	H3-H0	17	L5F-H3, L4@	2	H0-H4	1
・2+3		H3-H1	1	L5F-H4@	6	H0-L0	4
H0-H0=	27	H3-H3=	90	L5F-H4, L4@	1	H0-L3	2
H0-H3	3	H3-H4	15	L5F-L0@	3	H1-H1	9
H0-L0	15	H3-L0	7	L5F-L2@	2	H2-H1	1
H0-L3	1	H3-L2	20	L5F-L3, L5F@	1	H2-H3	1
H1-H1=	2	H3-L3	9	L5F-L4@	9	H3-H0	1
H1-H3	1	H3-L4	7	L5F-L5F=	1	H3-H1	2
H1-L3	1	H4C-H4=	1	L5F, H3-H3@	1	H3-H3	11

(2 + 3 続き)		(3 + 2 続き)		(3 + 2 続き)		(切れ目なし続き)	
H3-H0	1	H5F-H0@	1	L5F, L0-L5F, L0@	1	H3-L2	1
H3-H3=	54	H5F-H3@	1	L5F, L4-H3@	1	H3-L3	1
H3-L0	1	H5F-H4@	2	L5F, L4-L4, H3@	1	H3C-H1	1
H3-L3	6	H5F-L4@	1	L5F, L4-L3@	1	H3C-H3	2
H3C-H0	1	H5F, H3-H0@	1	・ 4 + 1		H3C-L3	3
H3C-H3=	27	H5F, H3-H3@	6	H0-H0=	31	H4F-H3	2
H3C-L0	2	H5F, H3-H4@	2	H0-H3	6	H4F-L3	1
H3C-L3	6	L0-H0	29	H0-L0	10	L0-H0	1
H4C-H3	16	L0-H0, L3	1	H0-L3	2	L0-L0	2
H4C-L2	1	L0-H3	5	H1-H1=	1	L2-L2	3
H4C-L3	5	L0-H4	1	H3-H0	2	L2C-L2	1
H4F-H0@	21	L0-L0=	107	H3-H3=	34	L2F-L2	2
H4F-H3@	187	L0-L2	1	H3-L3	2	L3-H3	1
H4F-L0@	4	L0-L3	4	H3C-H0	7	L3-L0	1
H4F-L3@	25	L0-L4	1	H3C-H1	1	L3-L3	1
L0-H0	5	L2-H0	1	H3C-H3=	26	L3C-L3	3
L0-H3	9	L2-L2=	7	H3C-L3	3	L4F-L3	2
L0-L0=	46	L2C-H3	2	H4-H0	2		
L0-L3	7	L2C-L0	2	H4-H3	2		
L2-H3	1	L2C-L2=	34	H4-H4=	4		
L2-L2=	1	L2C-L3	1	H5F-H3@	1		
L2F-H3@	2	L2F-H3	1	H5F, H4-H4@	2		
L3-H3	4	L2F-L0@	2	L0-H0	9		
L3-L3=	24	L2F-L2@	5	L0-H3	3		
L3C-H3	7	L3-H0	1	L0-L0=	22		
L3C-L3=	12	L3-H3	12	L0-L3	1		
L4C-H3	1	L3-L0	2	L3-H3	8		
L4C-L3	4	L3-L3=	35	L3-L3=	9		
L4C-L4=	1	L3F-H1@	1	L3-L4	2		
L4F-H0	1	L3F-L2@	1	L3C-H0	2		
L4F-H3@	23	L4-H0	3	L3C-H3	3		
L4F-L0@	12	L4-H3	23	L3C-L2	1		
L4F-L3@	45	L4-H4	3	L3C-L3=	6		

4拍に準じ、語末の拍内下降を含む型（5拍ではH5F・L5F）が、若ではほぼ全滅し、H3・L4などに変化している。これらの型は、壮では3+2、4+1の語に多く見られる。若では、わずかに次の3語にL5Fが残存：アタリマエ（当たり前）L0, L5F, エンノシタ（縁の下。完全な一語？）L3, L5F, ウシロカゲ（後ろ影）L5F。

次に、語中の拍内下降を含む型について。壮で拍内下降が現れるのは、主に、2+3のH4F・L4F、1+4のL2Fであるが、各々、若では、H4F・L4F→H3・L3、L2F→L2に変化している。後者は図式どおりの変化であるが、前者は下降位置が前にずれ、その結果、下降の位置が共通語と一致している。例：イシアタマ（石頭）H4F→H3、オンシラズ（恩知らず）L4F→L3。前にずれた後の音調は、祖体系の音調とも外見上一致する。

元々ほとんど語例がないL3Fは、調査語彙の範囲で消滅：オイセサン（お伊勢さん）L3F→L2、イズモサン（出雲さん）L3F→H1。若でも「3拍L3F+サン」の語例を探せば例がみつかるであろうが、これは一語ではなく、名詞+付属語に準ずるものであろう。

1.6 用言

動詞の基本形・タ形・否定形のアクセント、形容詞の基本形のアクセントを掲げる。各々、言いきりの場合と「～時」のアクセントは同じ。

動詞基本形	壮-若	タ形	壮-若	否定形	壮-若
211 キル	着 H1-H1	キタ	着 L2F-L2F	キン	着 H1-H1
212 ミル	見 H1-H1	ミタ	見 L2F-L2F	ミン	見 H1-H1
251 オク	置 H1-H1	オイタ	置 H1-H1	オカン	置 L2F-L2@
252 クカ	書 L0-L0	カイト	書 L0-L0	カカン	書 H0-L2@
253 オル	居 H1-H1	オッタ	居 H1-H1	オラン	居 L2F-L2@
311 アケル	開 L2F-L2@	アケタ	開 L2F-L2,H1@	アケン	開 L2F-L2@
312 ナゲル	投 H0-L0@	ナゲタ	投 L0-L0	ナゲン	投 H0-L2@
351 キザム	刻 L2F-L2@	キザンダ	刻 L2F-L2@	キザマン	刻 L2F-L2@

352	ウラム	恨	H0-L2@	ウンダラ	恨	H0-L2@	ウラマン	恨	L2-L2
353	アルク	歩	L2-L2@	アルイタ	歩	L2-L2	アルカン	歩	L3-L3
411	ハジメル	始	H1-L2@	ハジメタ	始	H1-L2@	ハジメン	始	H1-L2@
411	オサエル	押	L2F-L2@	オサエル	押	L2F-L2@	オサエン	押	L2F-L2@
412	アツメル	集	L2-L2	アツメタ	集	L2-L2	アツメン	集	L2-L2
413	カカエル	抱	L3-L3	カカエタ	抱	L3-L3	カカエン	抱	L3-L3

*左端の欄は、例えば、412は基本形4拍1段2類動詞、351は基本形3拍5段1類動詞を示す。

形容詞基本形 壮-若

2	ナイ	無	L0-L0
2	コイ	濃	H1-H1
31	オモイ	重	L2F-L2@
32	アツイ	暑	H0-L2
31'	トーイ	遠	H1-H1
41	ケムタイ	煙	H1-L2
41	アヤシイ	怪	L2F-L2@
42	スズシイ	涼	L2-L2
4x	オイシイ	美味	L3-L3

*左端の欄は、基本形の拍数と類を示す。

体言同様、用言でも、若では語中の拍内下降が消滅：L2F→L2。それについて、語音とアクセントの関係も大部分消滅：動詞411のハジメル（始）とオサエル（押）、形容詞411のケムタイ（煙）とアヤシイ（怪）など。なお、壮では、もともと動詞412アツメル（集）L2などに語音の例外があった。

また、35・41動詞や31・41形容詞の、1類と2類の区別は消失している。さらに、312ナゲルの基本形がH0→L0に変化。

1. 7 低接の付属語のアクセント

付属語のアクセントは、壮若とも、順接・低接・独立・融合があり（その全容は別の機会に譲る）、このうち、低接のものに、世代差が見られる。

壮では、低接の付属語は、H0及び有核の語についたときの振る舞いは京都方言などと同じであるが、L0の語についたとき、下降の位置が後ろにず

れるという現象がある。モトデスの例を以下に掲げる。^{注1)}

			壮-若				壮-若
H0+低接	ニワモ	庭も	H2-H2	H0+低接	ニワデス	庭です	H2-H2
L0+低接	イトモ	糸も	L3F-L2	L0+低接	イトデス	糸です	L3-L3
H0+低接	コトリモ	小鳥も	H3-H3	H0+低接	コトリデス	小鳥です	H3-H3
L0+低接	スズメモ	雀も	L4F-L3	L0+低接	スズメデス	雀です	L4-L4
H1+低接	イシモ	石も	H1-H1	H1+低接	イシデス	石です	H1-H1
L2F+低接	アメモ	雨も	L2F-L2	L2F+低接	アメデス	雨です	L2F-L2

同じ後部要素を持つ複合語でも、とくに後部要素が2拍の場合、低起式のほうが核の位置が後ろにずれる傾向がみられた：スマシジル（すまし汁）H3，ダンゴジル（団子汁）L4。それに準ずるものであろう。

若では2拍以上の付属語は、L0の語についた時は、壮と同じくずれる場合が多い（但しデモ・デス以外の付属語にはずれないほうが普通らしいものもある）が、1拍の付属語の場合は、ずれなくなっている。1拍の場合にのみ、拍内下降の消失がかかわるからであろう。

このL0の語についた場合の下降の位置の後退は、語音構造と関係があるか？1拍では、狭母音をもった低接の付属語は見つかっていないが、2拍では、シカが「狭広」であるのに、壮若ともに、やはりずれている。少なくとも、現状ではさほど語音とのかかわりはなさそうである。

			壮-若				壮-若
H0+低接	ニワシカ	庭しか	H2-H2	L0+低接	スズメシカ	雀しか	L4-L4
L0+低接	イトシカ	糸しか	L3-L3	H1+低接	イシシカ	石しか	H1-H1
H0+低接	コトリシカ	小鳥しか	H3-H3	L2F+低接	アメシカ	雨しか	L2F-L2

2. 前稿に対する補足

2.1 語頭が長音節の高起式の音調について

通常、壮若とも、句頭で、高起式は第2拍から高い。なお、佐藤（1996）が指摘するように、共通語ほどは低くない。また、H1型は例外で第1拍が高い。

しかし、語頭が長音節（第2拍が特殊拍）の場合は最初から高くなる。例：アイチケン（愛知県）H3，キンギョバチ（金魚鉢）H3，クーキジュー（空気銃）H3，コッペパン H3 はいずれも「○○○|○○である。また，アイカギ（合鍵）H0，アンナイ（案内）H0，オーゼー（大勢）H0，イッカイ（一回）H0 はいずれも「○○○○である。これは，原則として，単なる音的な現象として，問題なく処理できる。

多少問題があるのは4・5拍語で，語頭が長音節の場合，「○○|○○，「○○|○○○という音調型が現れる点である。壮において，他の型との併用も含めて，この音調型が現れる語を列挙する：カイヌシ（飼い主），ダイトシ（大都市），ギンガミ（銀紙），タンキヨリ（短距離），チョーキヨリ（長距離），どうこう，ヌイバリ（縫い針）；サンガツキ（三学期），パーセント，ピンセット；アンジル（案じる），カンジル（感じる），センジル（煎じる），モーケル（儲ける），イーダス（言い出す），チョンギル（ちよん切る），モーカル（儲かる）；イータイ（言いたい），キイロイ（黄色い）。（若でもこの音調は存在する）

これは，音韻論的にはL2型に属させることができると考えられる。その根拠は，語頭が長音節の場合，第1拍が低い「○|○○...は皆無であること，また，L2型は，前稿で述べたように，単なる音調記号のラベルとして「L」を付したが，高起／低起の対立が中和していると考えられることである。

2.2 促音と音調の関係について

促音を含む音節に核がある場合は，／○|ッ／と／○ッ|／の対立はない。その音調は，山坂氏は，高起式の場合は促音まで高く，低起式の場合は，促音とその前の拍の2拍が高いと内省する。例：「ヨーロッ|パ，オニ「ゴッ|コ（鬼ごっこ）。一方，真柴氏は，高起式の場合は促音の前まで高く，低起式の場合は，促音の前の1拍のみが高いと内省する。例：「ヨーロ|ッパ，

オニ「ゴ|ッコ（鬼ごっこ）。

これは、音調そのものに差があるというよりは意識の問題かと思われる。^{注3)}

壮においては、上の音調とは別に、4・5拍語に、○「ロ||ッ○、○「ロ||ッ○○という音調型が現れる。（若には現れない）。ッの前の拍に拍内下降が現れるので、上の音調と、音調面で区別することは容易である。音韻論的には、促音を含む音節の前の拍に核がある、／○|○ッ○...／と解釈されよう。

これが現れる条件は、動詞の活用形などでははっきりしている。基本形がL2Fである「殺す、気付く、囲む、飾る」は、タ形でも、コ「ロ||シタ、キ「ズ||イタ、カ「コ||ンダ、カ「ザ||ッタ、となつて、促音の場合も拍内下降が現れる。

しかし、体言の場合は、拍内下降を伴わない音調でもどちらでもよい、という語が多い。拍内下降を伴ってもよい、または拍内下降を伴ったほうがよい、とされた語を以下に列挙する：エニッキ（絵日記）、コギッテ（小切手）、ニガッキ（二学期）、ミガッテ（身勝手）、ハラッパ（原っぱ）、コロッケ、トラック、ラケット、ロケット、ロボット；シカッケー（四角形）、ニジッサイ（二十歳）。これらには、外来語、1+3の複合語に目立つ。

拍内下降付きの音調は、祖体系のH1に由来すると考えられるが、上にあげた語は、祖体系に近い香川県飯野方言・三本松方言でも、H1とL2に揺れるものが多い。^{注2)}

これについては、個人差がかなりある可能性がある。さらに、話者の意識もからんでいるのかもしれない。

2.3 壮年層における下降のずれの確かさの度合について

壮の場合、語音の条件と形態素の切れ目の位置によって、下降が後ろに半モーラずれるかどうか、ほぼ決定された。例えば、①イモバタケ H4F（芋畑）・イトミミズ L4F（糸みみず）（以上祖体系でH3またはL3）、①'コイゴ

コロ H4F (恋心) (以上祖体系で H3), ②ムラ L2F (村)・ココロ L2F (心)・ウメボシ L2F (梅干) (以上祖体系で H1) は, いずれも, ずれる条件に合致し, 実際ずれる。

しかし, ずれの確かさは, まったく同じではなく, ②>①'>①のようである。すなわち, 語頭 (②) ではずれはほとんど義務的であるが, 語中の形態素の初頭 (①) はそれほどではなく, ずれなくてもそれほどおかしくはないという。なお, ①の中で, ①'のように, 後部要素が単独の語として使われる場合に L2F である場合 (ココロ L2F) は, ②ほどではないが, ずれがやや確実らしい。^{注4)}

2. 4 高松アクセントの研究史について

前稿は研究史への言及が不十分だったので, 補足する。地理的分布に関するものは中井 (1995) ですでに述べたので, 高松アクセントの体系に関する研究に限る。

まず, いくつかの先駆的な研究の後, 和田 (1958) が, 高松アクセント体系の全貌をはじめて明らかにした。話者は昭和10 (1935) 年前後生 (本稿の C 段階) であった。

服部 (1973)・上野 (1975) は, 和田氏の主張するアクセントと母音の広狭の関係について, 和田氏の挙例に例外があることを指摘し, 音韻論的解釈について論じた。また上野 (1975) は連語の音調の問題などにも触れている。

稲垣 (1979, 1980) は, 自身の内省 (1906年高松生) などをもとに, 和田氏の報告より古い, B 段階のアクセントの全容を報告した。

Fukui (1982, 1984) は, 稲垣氏の主張する世代差の一部 (2 拍体言の H2F と L2F の合流) を, 実験音声学的に確認した。

木野田 (1982) は, 香川県香川郡香川町 (高松と同じアクセントらしい) の「青年層」のアクセントが, 和田氏の報告からさらに変化し, 語中の拍内下降が消滅しつつあることを報告した。(本稿の C から D への中段階)。

佐藤（1987）は、稲垣氏とほぼ同年の話者を調査し、その内省報告の一部に疑問があり、いくつかの型（H3F など）の存在が疑わしいとことなどを指摘した。

以上の研究を、対象とするアクセントの新旧をもとにして並べると以下のようになる。

	B	C	D
	稲垣	和田	木野田
	Fukui 話者 MU	Fukui 話者 TI	
	佐藤		
話者	1900	1930	1970
生年			

注

1) 壮では、用言につく1拍低接の付属語に、さらに、次のような例外的な振る舞いをするものがある。(若ではただの順接に変化している)。

H1-低接 キルゾ 着 H1 L2F-低接 アケルゾ 開 L2F
L0-低接 カクゾ 書 L0 H0-低接 ナゲルゾ 投 H3

H0型(投げる)には低く付いていて問題ない。L0型(書く)に付いたときは、モと同じなら、語末に拍内下降がある、カク「ゾ」になるはずであるが、例外的に全体が無核になっている。これは、ゾが上昇調のイントネーションを取りがちであって(カクゾ「一(書)」、「キルゾ「一(着)」、上昇調と拍内下降とは相容れないために無核化したものであろう。

2) 真柴氏と同学年の石岡久子氏(和田1958の話者のお一人で旧姓梶氏。昭和10年生)は、山坂氏と同じく、促音まで高いとする。ちなみに、香川県飯野方言の玉井節子氏も、促音まで高いとする。あるいは、促音まで高いとする意識が、讃岐式では一般的なのかもしれない。石岡氏には、1997年7月にお目にかかった。

3) これらの語について、上記石岡氏にアクセントを尋ねたところ、いずれも通常の音調で拍内下降を伴わないが、逆に、真柴氏が拍内下降を伴わないとする「ポケット」は拍内下降ありという。要するに石岡氏は、真柴氏よりも、はるかに拍内下降のない語が多いのである。

先に、1. 3. 2節で、3拍体言でL2とL2Fの所属語彙に個人差があることに触れたが、実は、真柴氏は、石岡氏よりも3拍体言にL2型が少なく、L2Fが優勢である。このことと関係があるのかもしれない。

なお、存疑であった4拍L3F型(前稿pp.75-76)について。タチバナ(楠)、クスノキ(橘)の2語は、石岡氏もL3であって、L3Fではなかった。

4) ちなみに、真柴氏の場合、東京住まいが長いので、私と自由な会話で話す時は、ほぼ共通語

的なアクセントで話されるが、その場合も、②に該当する場合はたいていいずれている。外来語などもそうである。しかし、①はずれないことが多いようである。

[付記] 調査に協力していただいた、真柴フミ子氏・山坂晃平氏・玉井節子氏・石岡久子氏の御厚意に、厚く御礼を申し上げます。

引用文献（前稿であげたものを除く）

- 上野善道 1975 「アクセント素の弁別的特徴」『言語の研究』6
- 佐藤栄作 1996 「ゆるやかな下降調の聴き取りと内省について」『言語学林1995-1996』三省堂
- 中井幸比古 1995b 「高松方言におけるアクセントと語音の関係について」『神戸外大論叢』46-5
———（近刊）「讃岐式アクセントと中央式アクセントの対応について」『島田治還暦記念論集』
- 服部四郎 1973 「アクセント素とは何か？そしてその弁別時特徴とは」『言語の研究』4